

社会福祉事業

- 1 施設運営強化事業として、高い理念を掲げて努力し、基準外職員の確保と施設整備に力を尽くしてきた。
- 2 これまで展開してきた「小規模グループケア」「地域小規模児童養護施設」を継続し、36人という大きな集団の中で、壁を接して暮らし会う「施設」としての生活を、普遍的暮らしの実現とストレスの緩和を目標にした小規模化へ転換していく努力を怠らずにしてきた。
- 3 高校卒業後、社会に出発した子どもたちが帰ってくるのが可能な施設整備、及び資源の整備に努めた。常に卒園した者が訪ね戻り、宿泊し英気を養い、また社会に戻っていくことが日常的になってきた。
- 4 被虐待の子どもたちへ、児童精神科医療及び臨床心理士の関わりを確保して対応した。また、職員の特に精神的再生産とのそ養成・資質の向上を図った。そのために、職員のメンタルヘルス対応の臨床心理士を継続して配置してきた。
- 5 食生活の更なる向上を目指し、豊かな食生活づくりに心がけてきた。
- 6 建設後29年を経た建物の劣化や損傷について、補修・改修は引き続きの課題である。
- 7 合理可能な業務の省力化を進め、子どもたちの暮らしに役立てる努力をしてきた。
- 8 広報活動はこの仕事の啓蒙と支持の拡大をはかるための重要な事業の一つである。引き続き読者層の維持開拓に努めた。
- 9 多くの方々の理解を得て、一般寄附金などを、光の子どもの家を支える会(永野三恵代表)や自立進学基金(芹沢俊介代表)の強化拡大に取り組んだ。
- 10 「光の子どもの家後援会」と「しずくの会」の協力を得てバザーを実施した。
- 11 子どもたちの暮らしを豊かにする資源として、後続の働き人を育てるために実習生を受入れた。
- 12 ボランティアを養成するまでには至らなかった。
- 13 職員の年齢が高層化してきている。よりよい施設運営のために、諸会議を定例化し、特に若い職員の意見や思いを尊重し、新しい発想を取り入れていくように図った。そのことで、数年先に予想される職員の世代交代りに備えてきた。
- 14 卒園者、退職者もこの家を精神的拠点にできるように繋がりを大切にし、関わりの責任を果たしてきた。このような理念へのアプローチに疑いを持つほどの試みに出会うこともあったが、相違を確認して取り組んできた。
- 15 男女混合縦割りという担当グループの構成メンバーひとりひとりが、生活の主体者となり意欲的に生活できるように、お互いが育ち合いが可能な日常を保証してきたが、性教育については引き続きの課題である。
- 16 目標を持ち希望を産み出す進路選択が可能になるように計画し、最善の方法で学習指導を実施してきた。
- 17 家族関係を光の子どもの家の生活場面に入れてはいけないという条件の無い限り取り入れ、共に育て、共に育つ関係を今年度も継続した。
- 18 お互いに相手をもっと子どものためによりよく働けるよう願って、お互いに自己総括を実施し、資質の向上と信頼関係をつくる努力を重ねた。

公益事業

無

収益事業

無